
開会挨拶は田村裕良会長

北海道土を考える会 夏期研修会

テーマは「土壌向け保健指導と栄養補給」

▶7月10日、11日
（北海道上富良野町、中富良野町）

去る7月10日、11日に北海道土を考える会の夏期研修会が開催された。実演検討、座学の講義、現地研修と充実したプログラムはすべて土壌の話題。北海道内の農業経営者に、福岡から駆け付けた農業者、実演や情報提供に駆け付けた関係者ら約85名が参集した。

開会挨拶は、田村裕良会長。同会の事務局をスガノ農機㈱北海道支店に依頼し、役員の発案のもと協力して開催に至った経緯を参加者に報告した。続いて、晴天に恵まれたホワイト農場での実演検討会へ。この実演のために春先に緑肥を播種し、その処理方法について作業機を並べて比較検討した。今年は例年に比べて降雨が少ないうえに、実演したホワイト農場が営農圃場でないこともあり、プラウで反転しても大きな土塊が上がった。砕土・混和状況を判断するには役不足な部分は否めないが、参加者らは興味深く見入っていた。

次に、土の館の研修室に場所を移して、講義の部へ。まず、農研機構・農業環境変動研究センター・土壌資源評価ユニットの高田裕介氏が登壇し、全国デジタル土壌図について紹介した。誰でもパソコンやスマートフォンから日本全国の土壌の種類や分布が閲覧・検索できる便利なシステムだ。現在公開されている土壌図は1979年以前の調査データに基づく。以降40年間の土地利用あるいは客土や営農等による変化は反映されていないことから、データ更新にも今後期待したいところである。

続いて登壇したのは、帯広畜産大学・グローバルアグロメディシン研究センター教授の谷昌幸氏。「土壌断面を見ることが、土づくりの初手」と題して、北海道内の農地で調査した土壌断面写真を見せながら、土壌の成り立ちと管理方法の適性について話した。生産現場に近い話題であり、質問が投げかけられ、参加者の関心を引いていた。

講義の後は、恒例のジンギスカンバーベキューの情報交換会。かつての夏期研修会の雰囲気を取り戻し、会員らの情報交換、講師を交えての農業談義は夜遅くまで続いた。

2日目は、朝から総会が開催された。田村会長が来年夏まで続投し、事務局と協力しながら、会の運営の陣頭指揮を執ることが確認された。

その後、中富良野町の㈲天心農場の圃場に移動し、根源的土壌調査のライブ解説が行なわれた。農研機構・農業環境変動センター・土壌評価ユニットの前島勇治氏は、地形図や地質図、土壌図から土壌の成り立ちを読み取り、2カ所の土壌断面について解説した。圃場を管理している北川和也氏との対話により、作物や営農管理との関係についても言及した。

2日間にわたる土壌に向き合う研修会を終えて、参加者には一様に満足した表情が見られた。（加藤祐子）



今回の実演は役員らがディーラーに協力を呼びかけ実現した。土壌のことをもっと知りたい。何か有益な情報がないか。いつもの仲間と新しい顔ぶれが集まった。

実演検討　緑肥の前処理を考えよう

大型の作業機が並び、緑肥の鋤き込みを実演した。砕土・混和を行なう作業機は同じ作業を２回繰り返した場合と比較した（左側：１回、右側：２回）。

サイドカッター（スガノ農機）



緑肥の腐植を早めたい場合にはサイドカッターやシュレッダーで裁断するのが効果的。畔の草刈りなど出番も多いはず。地面ギリギリで細断すると、次に生えてくる草もそろう

カットロータリー（スガノ農機）



本州でも北海道でも好評なタテ爪のロータリー。硬盤層ができず、バーチカルハローより砕土性に優れる。スタブルカルチ、プラウの後作業に最適。２m 幅、３m 幅をラインナップ

ミックスロータリー（スガノ農機）



「作物によっては砕土・整地が必要な圃場もある」という理由で、スガノ農機が提案するミックスロータリー。中耕・鎮圧が必要かどうかでローラーを選ぶとよいそうだ

ディスクハロー・ルービン 10（レムケンジャパン）



ディスク径が 625 ㎜と大径になり、左右対称型になった。前で外側に土を散らし、後ろで内に寄せるので偏らない。表層混和なので、緑肥が土に混ざる感じの仕上がりになる

ディープチゼル（三菱マヒンドラ農機）



45 ㎝間隔のチゼルと２本のスパイクローラーを組み合わせた構造。ローラーの間に土を抱えて、砕いていく。程よく土塊が圃場に残る。トルコの HISARLAR 社製

スタブルカルチ（スガノ農機）



後端のローラーを油圧で跳ね上げるアタッチメントを装備し、爪の間隔を改良し詰まりにくい構造に。既存機にも後付けでき、四隅や外周の処理が楽になる。新型のパイプローラは土詰まりを軽減し、砕土性を改善した

現地研修　根源的土壌調査 Live

土壌学者が行なう土壌調査に、その圃場のオーナーや関係者が立ち合って、対話をしながら、地勢やその歴史を踏まえて土壌の成り立ちを理解する。











1 講師の前島勇治氏は手書きで色塗りした地形図を持参し、周辺の地勢の説明から解説を始めた　**2** 土壌調査のためにユンボで掘り上げた穴を取り囲む参加者ら。井戸端会議ならぬ“穴端会議”だ。圃場主の天心農場・北川和也氏によれば、12 ～ 13 年間アスパラを作付けしてきた圃場で、今後は麦類を播く予定という。今回は圃場内の２カ所に穴を掘り、調査を行なった　**3** 前日の谷昌幸氏の講義では多様な土壌断面の画像を目に焼き付けた　**4** 実際の土壌断面。北海道では珍しい細粒の砂が見られ「保水性の欠片もない圃場」とのこと。灌水設備を備えていることと合致する。また深さ 40 ㎝までの表層が硬いのは、アスパラの生育中は畝間以外を耕さないことと、収穫する人が歩く踏圧も影響しているという　**5** ２つ目の土壌断面。アスパラの根が入っている様子を観察できる。アスパラの根は２段階の根茎を持ち、上側で貯蔵し、下側で養分を吸収するそうだ